「京のつちたま」の生い立ち

障がいのある人々の持つ芸術性を引き出す新製品を開発し、それを販売することで工賃アップを図る南丹圏域の「アートクリエイティブ事業」。その第1号製品となったのが「京のつちたま」。

社会福祉法人京都太陽の園（園部町横田）をはじめとする南丹圏域の就労支援事業所と京都伝統工芸大学校（園部町小山東町）、そして京都府南丹保健所が協働で商品開発に取り組まれました。

最初から「京のつちたま」構想があったわけではありませんでした。それは、まさに二人三脚。京都伝統工芸大学校教授の陶芸専攻の工藤良健さんは、「障がいのある人の豊かな感性を生かそう」と夜を徹して試作品を作られたそうです。そして始まった陶芸教室。障がいのある人たちと一緒に粘土をこね、やがて見えてきた可能性、創造性、夢。試行錯誤の末にたどり着いたのが、一番単純で重度の障がいのある人でもできる「丸める」という作業。いや、障がいがあるからこそ、できることなのかもしれません。一つ一つに作り手の感性が表れ、心癒やされる素朴さがそこにはあります。

丸めた後の工程は、できる作業を分担して進めます。穴開け、バリ取りといわれる穴周りの掃除、金具を取り付ける作業など。力を合わせてみんなの手で一つの作品が出来上がります。

商品として売り出すにあたって、販売戦略会議が行われました。そこで商品パッケージには、「障がいのある人が作った」ということはあえて書かないことにしよう、と話し合われました。『障がいのある人が作ったから買ってくださいというものではないし、ましてや情けや哀れみを請うものでもない。「京のつちたま」職人が作った一ブランドとしての価値を持って、世の中に売り出そう』という思いが込められています。

もちろん、商品が売れることは「京のつちたま」にかかわるすべての人の願いです。働いたその対価を受け取ることは労働者の当然の権利。商品がたくさん売れるほど職人たちの工賃は上がり、それでこそ、この商品開発は成功したと言えるのでしょう。障がいのあるなしにかかわらず、社会に参加すること、認められることが、自分の自信となり誇りとなり、また次の行動力へとつながっていくのではないでしょうか。